

特集：大学付属かえで幼稚園創立40周年

「保育レポート」から見るかえで幼稚園の40年

大瀧 知子

40周年を迎えて

かえで幼稚園は、1973年に短期大学付属園として開設されました。1998年からは大学付属かえで幼稚園と名称を改め、今年度（2013年度）創立40周年を迎えました。石井次郎初代園長は設立の目的について「一つには長い歴史をもつ学院の幼児教育の成果を幼児そのものために捧げることであり、今一つは幼児教育の研究と保育者養成に役立てることである」と述べています。時の流れの中、社会情勢の変化や教職員の交代があっても、本園の目的は変わることなく、イエスキリストに支え導かれ、みことばを基盤にしての歩みを重ねています。

保育レポートの始まり

保育レポート第1号は、開設4年目（1977年度）に作成され、1978年の夏前に発行されました。黒田成子第二代園長は第1号の『はじめに』に開設からの4年間の振り返り、「教師たちは試行錯誤の中で今日までの保育を続けてきました。（中略）教師会や泊まり込みの会で、何度長い話し合いや討論をしたことでしょう。（中略）ここに4年間の歩みを反省、整理し、一部分で

はありますが保育実践の研究報告書を出すことになりました。（中略）どのレポートも、いわゆる研究のための研究ではなく、まず子どもと共にある生活体験があって、そこから始めて研究が出てきたものです。この成果は子どもの幸せにつながるものであることはいまでもありません。（後略）」と、書いています。

今年の夏、本園で旧教師の集いがあり、その折に当時のいきさつが語られました。「開設の目的に掲げられた研究への思いはあったものの、開園当初はとてもその余裕は無く、保育の基盤をつくるのに精いっぱいであった」「その中で、飯田泰造主事は、『保育を語り合い文字にし、レポートとして残していけるように』という思いを持っておられた」「一方、『世の中には子どもを実験の対象とする園がある中で、研究のための研究にしてはならない。子どもを実験材料にしてはならない』という思いも強くあった」「やがて、教師の中から、保育を客観的にまとめてみようという意識が生まれていった」等々・・・保育レポートの始まりの裏には、様々な葛藤もあったことがうかがえました。また、毎月「保育だより」に載せるため、自分た



開園当時の園庭で
一園内でのキャンプのひとつま（1974年）



「保育レポート」第1号～第20号

ちの保育を文章化していたことが、保育レポートを書くことにつながっていたと思われます。

そして、仕上がった保育レポート第1号を初代園長の石井次郎先生にお渡しした際、当時主任であった土橋先生は「とうとうやりましたな」との励ましのお言葉をいただいたとのことです。

保育レポートの成り立ち

保育レポートは、2013年3月に第20号を発行するまでに至りました。

内容は周年記念の特集であったり、土橋克子元園長の保育だよりの巻頭言集であったり、クリスマス特集であったりと、テーマが決まっているものもありました。しかしほとんどの号では、個々人が日常の保育の中から、また教師間の話し合いの中から課題（題材）を見つける（与えられる）ことがスタートでした。その課題（題材）には、必ずそこにつながる保育の実態があります。私たちは、いつの時も、実態を丁寧に見直し、その中の子どもの姿・保育者の姿・また時には保護者の姿から学び考える作業をします。まずは、自分自身で考察し言葉にします。なかなか自分の思いがまとまらずに時間がかかることもしばしばですが、なんとか形にしていきます。次に、それをたたき台として教師会に出し、練り上げていきます。話し合いの中、他の教師から自分の考察とは違う視点を与えられます。そのたびに、目の前が開けたり、自分の考えの浅さに打ちひしがれたりします。それらを学びや気づきとして考察に加えながら、レポートとし、次への目標を定めていきます。

この話し合いのくり返しは、時間も手間ひまもかかるものですが、そのプロセスこそが保育レポートの意味であると思ってきました。

保育レポート作りの変遷

全ての印刷物に通じることですが、保育レポート作成も手書き時代が長く、パソコンでの原稿作りが主流となったのは、第15号（創立25年記念号 1998年発行）ぐらいからです。今もかつて、保育レポートは何度も何度も書き直しながら仕上げていくものなので、手書き時代は、現在よりももっと時間を要しました。非常に大変でしたが、私個人としては、鉛筆を走らせ消しごむで幾度も消し消し、考えを深められたあの頃もなつかしく思えます。



現在の園庭で
—芝生の上で踊る子どもたち—（2013年）

＜「はじめに」の執筆者＞

第1号から第7号までは、巻頭の『はじめに』を、その当時の園長(短期大学学長)や主事、または短期大学の先生が書いています。【黒田成子先生（1号）・飯田泰造先生（2、5、6号）・榎田磐先生（3号）・田島信之先生(4号)・芝恭子先生（7号）】どれも重みのある言葉ばかりですし、その文面から、短期大学付属園としてのつながりの中でレポートをまとめたことも伺えます。第8号（1986年発行）以降は『はじめに』を当時の園長土橋克子・森高ホサナが担当しています。かえでの保育の基盤がある程度確立し、レポート作成も現場に任せられたともいえましょう。

＜判型＞

第15号まではB5判、(第16号のみA5判)、第17号以降は読み易さを考えてA4判に変更されました。

＜学会発表へ＞

保育レポート第1号の作成と同年の1977年、かえで幼稚園は初めて日本保育学会で研究発表をしました。(日本保育学会第30回大会「運動会を契機とした遊びの変化」丸山・宇賀神・土橋) この発表では倉橋賞(注)を受けました。

その後も、保育レポートと並行してまたは保育レポートの発行の年と交互して保育学会での研究発表を自分たちの身の丈にあった形で細々とではありますが続けています。また、近年では、日本キリスト教教育学会においても、保育の中からの発表をすることにも努めています。

保育レポートに一貫して流れる

東洋英和のキリスト教保育の心

第1号の一つめのレポートの題は「キリスト

教保育を考える - 子どもにとって礼拝とは、神とは何か-」です。そして、第20号の最後のレポートの題は「【キリスト教保育】 1. 平和教育-たたかいごっこからの一考察- 2. 自由保育について」です。その間に、子どもの自発的な遊びからの考察・クラスの集いの中での保育者の取り組みからの考察・造形や音楽等の表現活動からの考察・保護者と共に歩む生活からの考察等、様々な題材のレポートが100余り報告されています。

<事例>

この記事をもとめている最中、編集者より「第20号にあるたたかいごっこに関するレポートを紹介してみても？」との問いかけを受けました。

たたかいごっこに対する迷いや悩みは、この数十年教師の中にいつの年も少なからずあり、キリスト教に立っての対応をしながらも、ひとつの課題でした。そのような連続性の中、2011年度の4歳児の生活が不安定で、遊びが低迷していることの一因が「たたかいごっこ」であると考え、「戦いは悲しいこと、武器を向けないで」という呼びかけを、教師皆で、また保護者と共に、様々に試行錯誤し取り組み、ひとつずつ改善に向けることができました。

私たち教師の思いがひとつになり強められたのは、ミス・レーマンが戦時体制下に実践しておられた「平和主義に徹した保育者のあり方」、学院が2010年に発行した『カナダ婦人宣教師物語』の記事から教えられたことが大きなきっかけでした。

私はその取り組みを省察したいと思い、テーマを「『キリスト教保育』における平和教育-たたかいごっこからの一考察-」として、まずは、2012年6月の日本キリスト教教育学会第24回大会にて発表しました。そしてその発表に、保育の中での礼拝の実践と学会後の実態、そしてまとめを加え、保育レポート第20号に載せました。

反響は、学会においても保育レポートにおいても、思った以上に大きいものでした。みことばに基づいて励ましを受けたり、共感の言葉をいただいたり、感心されたりすることも多くありました。一方、「子どもが喜んで遊ぶのだから、たたかいごっこを止めることはできない」とか、「幼児期には生身のふれあいによる痛みを伴う体験が大事である」等々の意見も届きました。いずれにしても、私たちがキリスト教保

育を守り継承するための貴重な問いかけとなりました。

どのレポートにおいても、行きつ戻りつしながらも辿りつく着地点はかつて宣教師の先生方が命がけで伝えて下さったイエスキリスト中心の保育であり、歴代の短期大学や大学の先生方が教え続けられてきた子どもの遊び（暮らし）を大切に保育です。

くり返し確認されてきたことを大きくまとめると、次の5点といえるでしょうか。

- ・礼拝のある生活の中での「敬神奉仕」
- ・主体性をもって生きることを保障すること
- ・他者と共に生きることを支えること
- ・キリストにある自由を重んじること
- ・平和教育・希望の教育

今日も子どもたちの幸せのために

考え合う保育者集団でありたい

今年7月、村上陽一郎園長（大学学長と兼務）と共に1学期を振り返る時を持ち、その中で教師一人ひとりが今年度の自分自身の課題を子どもとの生活（保育）から語りました。その話し合いが保育レポート第21号につながっていきます。発行までどれだけの時間が使われるでしょうか。その過程での学びが、子どもの幸せな幼児期を支えることを信じ、前に進みます。

今をみつめ、前に進むことは、原点（歴史が物語る真理）に戻ることであることを、この原稿をまとめながら実感しています。

（大学付属かえで幼稚園副園長）

（注）倉橋賞は、1956年に故倉橋惣三氏の保育学会における功績を記念し、日本における保育学の研究を奨励する目的をもって創設された賞である。1984年より、日本保育学会研究奨励賞と名称変更された。



村上陽一郎園長先生を交えて「保育レポート」第21号に向けての話し合いをするスタッフ（2013年7月）

宣教師達のお墓を探して（2）

カナダ合同教会引退牧師 有賀 誠一

前号（No.80）では、カートメル先生のお墓探しに始まって、オンタリオ南部にある他の宣教師のお墓探しに導かれていった経過をご報告しました。今回はサンダース、ネトル宣教師のお墓探しを含めた、その後の経過をご報告いたします。

ミス・ケギーとミス・サンダース

センテナリー教会を引退したアーウィン牧師と私は、現在ハミルトン市ダンダス町にある聖パウロ合同教会（St. Paul's United Church）の礼拝に出席しています。この教会は20世紀前半に女性宣教師を送り出したことがあるのですが、そのことは現牧師のリック・スピーズ（Rick Spies）牧師が着任して気づくまでほとんど忘れられていました。教育宣教師としてアフリカで働いた経験のある彼は、教会の資料庫に保存されていたマーガレット・ケギーの写真に簡単な説明を付けて壁に掛け、お墓もダンダス町の墓地にあることをつきとめました。アーウィン牧師と私の、カートメル先生のお墓探しより4年前のことですから、ハミルトン市での英和関係宣教師のお墓探しはこの時点で始まっていたと言えるでしょう。

しかし、聖パウロ教会がマーガレット・ケギーの他にもう一人宣教師を送り出したことは、ごく最近まで完全に忘れ去られていました。『カナダ婦人宣教師物語』の英訳が出版されてからまもなく、教会の長老の一人と雑談していたときに、彼がふっと「たしか、もう一人日本に行っ

た宣教師がいたような気がするが、」と言って、資料庫を調べ、ヴァイオレット・サンダースに関する資料を見つけ出してくれました。それでわかったことは、20世紀前半の聖パウロ教会には若い女性会員による海外宣教支援グループがあり、ケギー宣教師らの海外宣教活動を支援していたのです。20代のヴァイオレット・サンダースもその会員でしたが、1931年に自ら宣教師となって日本へ渡ったのです。幸いなことに東洋英和の史料室にはサンダース宣教師の写真と資料が少し残っていたので、そのコピーを聖パウロ教会に送っていただくことができました。

写真は届きましたが、お墓の所在はわかりません。唯一の情報はダンダスでお葬式をしたということだけでした。ダンダスの葬儀社に問い合わせ、古い帳簿に記録されていた埋墓地の名前を教えてくださいました。「そんなに大きな墓地ではないから、探したら見つかると思いますよ」という楽観的な女性職員の声に送られて、ダンダスから15km 西にあるコープタウン村のマウント・ザイオン墓地へ。

小さな墓地とは言っても墓石は何百とありますし、堅型もあれば平板もあります。端から順番に見ていきましたが、夕方になっても見つかりません。最後の堅型墓石もサンダースのものではありません。がっかりして腰を屈めた途端に、木の間からもれた夕日が、まるでスポットライトのようにその堅型墓石のすぐ隣の地面を照らしたのです。良く見ると、その地面には掌ほどの穴が開いていて、その下に、土に埋



ミス・ケギー



ミス・ケギーのお墓

←上部にMargaretの名と生没年が刻まれている。

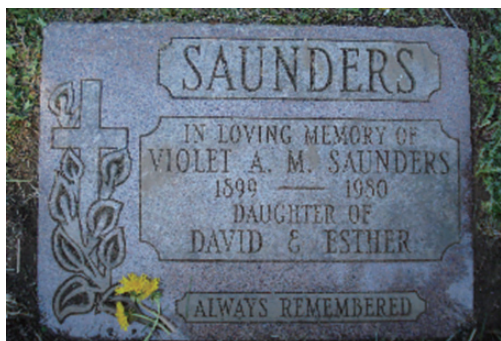
まった墓石と「Viol」と言う文字だけが見えま
した。「これだ！」夢中になって両手で土を
取り除くと「Violet A. M. Saunders」と刻まれ
た墓石が出てきましたが、それには「always
remembered」という言葉も刻まれていました
ので、忘れ去られていたサンダース宣教師の
ことを思って、ちょっと複雑な気持ちになりま
した。でも、これはきっと、人は忘れても「神様は憶
えていてくださる」ということを言っているの
でしょうね。



ミス・サンダース



小学部玄関にて後列右から3人目 ミス・サンダース、
左から4人目 ミス・マッシュェルソン (1950年代後半か)



ミス・サンダースのお墓

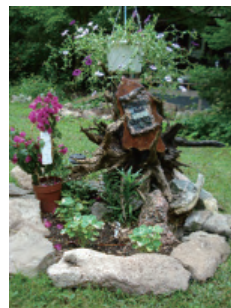
ミス・ネトル

センテナリー教会で私が使っていた合同教会
牧師名簿には「Mary Nettle」の名前が載って
いたので、その情報を頼りに電話番号を調べて
電話しました。電話に出られた女性はヴァレ
リー・バネート (Valerie Bannert) というカ
トリックのシスターで、大阪で宣教師をしてお
られたときにミス・ネトルと知り合い、20年ほ
ど前に二人でエラモーサ・イーデン (Eramosa
Eden) というエキューニカルな共同体を立ち
上げられたとのことでした。「ミス・ネトルは
お元気ですか？」とたずねると、「マリーは6
年前に亡くなりましたが、いまもここに居ます
よ」という、良く解らない答えが返ってしま
した。「え？」と聞き返すと「だから、言ったでしょ
う。ここに居るって」と言われるのです。よく
よく聞いてみると、遺体は火葬にして、遺灰は
共同体の庭に撒き、そこに記念碑が立ててある
とのことでした。

さっそく私の自宅から車で1時間ほどのと
ころにある共同体にお邪魔しましたが、ミス・ネ
トルの姪ご夫妻も来てくださり、いろいろとお
話を伺うことができました。庭には川が流れて
いて、その岸辺一体に遺灰を撒いたそうで、記
念碑というのは、岸辺にある石と流木を集めた
ものでした。素朴なものでしたが、東洋英和を
退職されて帰国されてからもキリストに仕えつ
つ天国に召されていったマリー・ネトル先生に
対する共同体の人達の尊敬と愛情を余すところ
なく示していて、シスター・バネートが言われ
た「マリーは、いまもここに居ますよ」という
言葉の意味を深く味わうことができました。



ミス・ネトル



ミス・ネトルの記念碑

ミス・スクルトン

スクルトン宣教師がハミルトンで亡くなったことは『カナダ婦人宣教師物語』に記載されていました。ハミルトン市の墓地管理事務所に問い合わせたところ、ハミルトン市の東の端にあるウッドランド墓地に妹のマイラさん(Myra Bernice Scruton 1983年没)と共に埋葬されているとのことで、早速行ってみました。大きな墓地で、管理人が配置図を見ながら案内してくれました。でも、そこにあるのはご両親の墓石だけでした。ご両親の墓石は平板型ですから、裏側に記載があるとも考えられません。

再度ハミルトン市の墓地管理事務所調べてみると驚いたことに、その名簿にはもっと以前に亡くなったご両親の住所以外の連絡先は記載されていないのです。ともかくその住所を探索してみました。日本のような戸籍原簿も住民票もないカナダでは、ずっと前に亡くなった方の住所を調べることは容易ではなく、親戚を探しだすのは更に困難です。でも最近スクルトン先生の帰国後のご住所を知らせていただいたので、それがご両親の家から歩いて数分のところにある古いアパートであることは確認できました。日系人牧師に葬式を頼んでおかれたという情報も載いたのですが、ハミルトン日系人合同教会の古参メンバーも「名前は聞いたことがあるが、会ったことはない」とのことです。教会に保存されている1980年代の冠婚葬祭記録にも記載がありません。現時点では埋葬場所がわかっただけで満足するしかありません。

その他の宣教師

史料室から送られて来た、シンプソン、キラム、ライアン、スコット各宣教師に関する簡単な情報をもとに、お墓の探索を続けています。



ミス・スクルトン



ミス・スクルトン 幼稚園児(年長組)に英語の歌を教えている(1952年)



ミス・スクルトンの両親のお墓

おわりに、ひとこと

なぜ東洋英和の教員でもなかった私がこんなにまで諸宣教師のお墓探しにのめり込んでしまったのか、いまだに不可解なのですが、きっと神様が私に、諸宣教師の信仰と生徒たちへの愛情を今一度カナダの人達に伝える使命を与えたからなのでしょう。「割に合わない仕事」ではありますが、もしそうでなかったら、次のような思いがけない恵みを受けることもなかったと思います。

前号で、マシューソン先生に紹介されてペンバルになったというカナダのご婦人と英和生のごことに触れましたが、この英和生は、東洋英和の設立と発展に大きな貢献をされた平岩愷保牧師の孫、平岩愛子さん(現フィッシャー夫人)でした(実名を使うことについては、本人の承諾を得ております)。しかも昨年愛子さんと電話で話し、彼女と私の姉(木田みな子)とはニューヨークのユニオン神学校で共に学んだ友人同士で、二人とも同期生と結婚しそれ以来幾十年、その二組の同期生夫婦が日本とアメリカに離れていても折にふれて連絡し合っていたということを初めて知って、大いに喜んだのです。

私の義兄となった木田献一は旧約学者で、山梨英和学院の学長や院長をつとめ、また最近まで東洋英和の生涯学習センターの講師をしていましたが、ほんの2ヶ月ほど患っただけで、今年4月に天に召されました。その訃報を愛子さんに知らせたところたまたまご帰国中であり、前夜式の参列と私の姉との30数年ぶりの再会がかなうという、偶然というにはあまりにも強烈な出来事が起こりました。これは神様からの恵み以外の何物でもないと思われ、今思い出しても感謝の涙を抑えきれません。

主の御名を讃えつつ、この稿を閉じさせていただきます。ありがとうございます。

墓地一覧（2）

名前・生没年	東洋英和 奉職期間	墓地名	墓地の場所
マーガレット D. ケギー Margaret Drummond Keagey 1880.4.4-1953.10.28	1908-1911 1913-1918	インターメント グローブ墓地 Interment Grove Cemetery	オンタリオ州 ダンダス 129 ½ York Road, Dundas, (Hamilton), Ontario
ヴァイオレット A.M. サンダース Violet Alice Maud Saunders 1899.9.11-1980.7.24	1931-1934 1940-1941 1952-1960	マウント ザイオン墓地 Mount Zion Cemetery	オンタリオ州 コープタウン Hwy 52 & 2nd Concession, Copetown, (Hamilton), Ontario
メアリー E. ネットル Mary Ellen Nettle 1929.6.1-2006.5.3	1963-1965	エラモーサ イーデン Eramosa Eden	オンタリオ州 ロックウッド 8138 Indian Trail, RR5 Rockwood, Ontario
M. ファーン スクルトン Muriel Fern Scruton 1899.10.27-1980.12.28	1925-1926 1949-1964	ウッドランド墓地 Woodland Cemetery	オンタリオ州 ハミルトン市 700 Spring Garden Road, Burlington, Ontario

＜今号で紹介された宣教師について補足＞

ケギー, マーガレット D.

ミス・ケギーはヴィクトリア大学（現在はトロント大学の一部）で家政学を修め、1908年に来日、東洋英和の他、山梨英和でも教えた。甲府では、女子職業学校 カートメル女塾の創立に尽力し、1918年から1年間シベリアの赤十字にて働く。その時彼女の送迎に集まったのがきっかけで東洋英和の卒業生の「麻の花会」が発足した。神に与えられたタレントを伸ばし、社会に働きかける女性になるように説いたという。1919年以降は専門の家政学の知識を活かし、農村の女性や都会の工場働く女工たちに公衆衛生や健康、栄養について教え、伝道した。浜松で伝道の後、1940年にカナダに帰国した。

（「百年史」「大学礼拝週報No.2005-20」より）

サンダース, ヴァイオレット A.

ミス・サンダースは1931年来日、東洋英和で1934年まで、その後山梨英和で教え、福井で伝道活動後、1940年帰国。戦時中はトリニダッドに派遣された。戦後1947年に再来日、はじめ静岡英和、1952年より東洋英和の小学部、短大、中高部で英語を教えた。同時に、ミス・ハミルトンの後をついで二番地の伝道館にてバイブルクラス（聖書研究会）を指導、「麻の花会」や母の会でもよく聖書の講義をして下さった。体格のがっしりした、目の輝きの印象的な方だったという。1961年帰国。

（「敬和会」No.37・40より）

スクルトン, M. ファーン

ミス・スクルトンについて、詳細は『カナダ婦人宣教師物語』でとりあげているので、ここには葬儀関係のことのみ紹介する。妹様によると、先生は何事もきちんと準備なさる方だったので、亡くなる前に自分で挨拶状を用意し、火葬にすること、礼拝司式者の中に日本人の牧師を依頼すること、愛唱歌等も決めていたという。（「はぐくみ」第14号より）

ネットル, メアリー E.

ミス・ネットルに関して資料は少ない。3年間の日本での働きの後1965年のご帰国に際して新聞部員のインタビューに答えている。日本が大好きになり、5か月後には日本に戻り、永住して北海道の教会で働きたいと張り切っておられたという。しかしその後の消息は伝わっていない。（「東洋英和新聞」第96号による）

☆有賀先生は全くのご厚意から宣教師の方々のお墓探しを続けて下さっています。

史料室でも情報を集めていますので、(帰国後の) 宣教師の先生方からのお手紙、ご家族からの手紙などをお持ちの方は、どうぞ史料室にご連絡下さい。

(Tel.03-3583-3166 Fax.03-3583-3329)

〈資料紹介〉 23

かえで幼稚園「保育だより」

永瀬真澄

開園とともに創刊

本園では1973年4月開園の翌月より「保育だより」を毎月1回、発行し続けている。第1号（1973年5月16日発行）の内容は当時主事であった飯田泰造先生の巻頭言「私たちはなにをしてやれるでしょう」と各学年10行ほどの子どもたちの様子、そして5月の暦を載せたB5判4ページのものであった。

創刊の頃

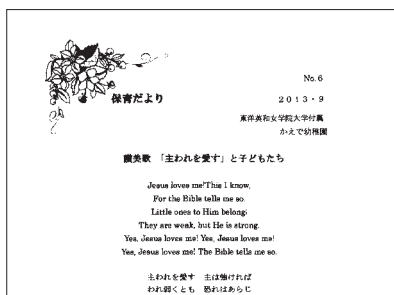
「保育だより」発行にあたっての一番の目的は保育の実践を保護者に伝え、理解を得ることであった。しかし、飯田先生の考えの中には、保育者が日々の保育を省察し保育者間の意思疎通をはかる機会とする目的もあったと思われる。そこで、保育内容を「できるだけ具体的に、親がなるほどと思ってくれるように自分の言葉で表しなさい」と先生は提案された。それに対して自分の保育を文章化することに不慣れだった保育者たちは最初反発を表わしたが話し合いを重ねて理解し合い、6月号にはB5判1ページ分の学年のページが加えられた。当初は担任保育者と共に園長、学科長、主事、主任の文章を織り込みながら保育内容の文章化を軌道にのせていった。こうして始まった担任の書く〈学年のページ〉は現在まで引き継がれており、「保育だより」の中心となっている。

当時、月末になると保育後の職員室では鉄筆でガリガリとガリ版を削る音と中高部の事務局から譲り受けた謄写版をこすり上げる音がしたと聞く。保育者にとってはおしゃべりをしながら作業をする時がお互いの思いや子どもの見方を理解する時となっていたということである。

現在に受け継ぐもの

構成や内容については創刊から5年間ほどは試行錯誤を繰り返したが、その後、ほぼ現在と同じ構成の〈巻頭言〉〈暦〉〈お知らせ〉〈学年のページ〉〈保護者の声〉となり、毎月おおむね10ページ前後である。

〈巻頭言〉には保育の基本、キリスト教につ



「保育だより」(2013年9月)表紙上部

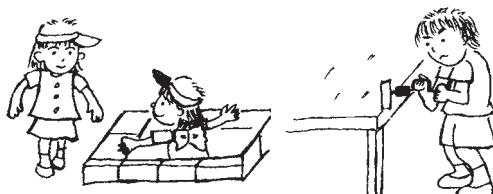
いて、幼児期の特徴、遊びの捉え方等を園長、主事、保育主任が書く。例を挙げると「自分らしく」(黒田成子記)「巣立ちゆく幼き者に」(石井次郎記)「子どもと祈り」(土橋克子記)「安心を培う」(森高ホサナ記)等である。〈暦〉〈お知らせ〉のページには毎月の保育時間、行事、持ち物の他、子どもの生活にふさわしい配慮や教育的意図も書かれる。〈学年のページ〉は前述の通り各担任が前の月のエピソードから保育を語る。その時、子どもが楽しんでいること、成長を感じさせられること、時にはけんかや葛藤の場面も書き、保護者と共に子どもの生活を分かち合えるようにと考えている。歌やイラストを入れて楽しく読んでもらうことができるようにも工夫している。〈保護者の声〉の欄(毎月には無い)には、連絡帳等を通して伝えられた保護者の思いを載せる。

また創刊よりずっと「夏休み号」「クリスマス号」などの特別号を年に1、2回発行している。

その時代によって取り上げる話題やエピソードは違うが、根底にあるかえで幼稚園のキリスト教に立った理念と子どもの生活の中で大切なことは変わらないと感じる。

「保育だより」はただの“お便り”ではなく、私たち保育者にとっても保護者にとっても子どもの育ちや大人としてのあり方を気づかされたり、考えたりする基点ともなっており、「保育レポート」に発展する話題も多い。また、園外の方からも本園の保育の特徴がよくわかる、と励ましや感想を得ている。

(大学附属かえで幼稚園主任)



〈思い出の先生がた〉26 秋月 徹先生

小学部長 秋月徹先生

「秋月先生」こうお呼びすると、にこやかな顔とやさしいお言葉が浮かびます。

秋月徹部長先生は、長く小学校教育に携わられた外崎長三郎先生・江良顕三郎先生の後を継がれ、福岡女学院中学・高校副校長から小学部に赴任されました。部長としてご自分の経験はさておき、小学校教育に渾身の力を注がれました。

秋月先生は、朝、大変早く学校に来られ、次々に出勤してくる教師とにこやかにあいさつを交わされます。8時5分に職員朝会が始まり、「主の祈り」を唱え、部長先生が聖書をお読みになります。み言葉はその日の力となって、私達を教室に送り出します。

ある日、そろそろ授業が終わろうとする頃、秋月先生は日なたぼっこでもするかのように、校庭の号令台に腰かけていらっしゃいました。

チャイムが鳴って校庭に飛び出して来る子ども達が、秋月先生を見つけると、先生めがけて走って行きます。にこにこの顔を見るだけで嬉しくなって、「先生、これ上げる」と差し出すのは校庭の小石や砂。先生は嬉しそうに「きれいだね」と、手の平にのせてにこにこしていらっしゃいます。先生のポケットの中は、いつも小石や砂がいっぱい。

また、軽井沢追分寮の夏期学校では、グリーンチャペルで礼拝後、体操をします。時々、部長先生に指導をお願いしました。先生が、「ここに木がたくさんあるでしょう。用意ドンで走って行って10本の木に触って帰っていらっしゃい」とおっしゃるやいなや、子ども達は「キャーッ」と言って木の間を走り回ります。「1本、2本、3本……」と、声が飛び交います。「ああ、おもしろかった」と楽しい気持ちになって、一日が始まります。

先生は、このように楽しい時間を作って下さるのに、「僕の言葉は通じているのだろうか」と心配そうに、奥様におっしゃることがあったそうです。

先生は長く中学高校で主事・副校長を務められたので、小学部の一人ひとりを知ろうとそれはそれは懸命な努力をしていらっしゃいました。



秋月 徹先生

また、社会科に詳しい先生の心に残るお言葉の一つに、「日本は資源の少ない国だから」と、物を大事にすることを示されました。私はいつも、「資源の少ない国だから、無駄に使わないように」と、自分に言い聞かせることで、先生のお心を仰ごうとしています。

先生は、ご退職後、白杖を使うようになられました。退職教職員の「銀杏の会」に、「奥様とご一緒に」とご案内したところ、「うちの盲導犬です」と爽やかな楽しい会にして下さいました。

秋月徹部長先生は、心を尽くして主に仕える一日一日を送られました。そのお言葉やお姿は、絶えることなく心に浮かび消えることはありません。

文 倉本 和 (元 小学部教頭)

秋月 徹 (あきづきとおる) 先生

—略 歴—

- 1917年 7月28日 東京に生まれる
- 1942年 (朝鮮) 京城帝国大学法文学部卒
- 1942年 京城私立進明高等女学校に就任
- 1943年 朝鮮平壤高射砲隊に応召、シベリア抑留を経て1948年帰国
- 1948年 福岡女学院中学校・高等学校に就任
- 1972年 副校長に就任 (～1974年)
- 1975年 東洋英和女学院小学部長に就任 (～1980年 9月30日)
- その後、活水女学院中高校長、キリスト教教育同盟総主事を歴任
- 2007年10月17日永眠 (享年90歳)

「史料室だより」目次No.71～80

No.71 (2008.11.14) 特集：青楓寮

青楓寮と私達 1947年～1949年 菅沼 和恵
わが故郷の青楓寮 1976年～1980年

香川 朗子
〈資料紹介〉14「青楓寮」 堤 加寿美

〈思い出の先生がた〉16
加茂（令子）先生のこと 岡本 幸江

〈参考資料〉『五十年史』より 思ひ出の九月
一日（関東大震災） 加茂 令子

史料室の活動より（2008年3月～9月）

「史料室だより」目次No.61～70

No.72 (2009.3.16) 特集：短大保育科の歴史から
保育者養成を支えた教師陣 飯島千雍子

〈思い出の先生がた〉17
大中寅二先生の思い出 宮坂 育子

補足説明 恩物

〈資料紹介〉15 児玉光子氏寄贈「恩物」作
品集、授業ノート他 酒井ふみよ

学院史料展示コーナー 報告 酒井ふみよ
史料室の活動より（2008年10月～2009年1月）

No.73 (2009.11.12) 特集：「カナダ婦人宣教師物語」
「物語」は続く 山本 香織

編集にあたって 酒井ふみよ
〈思い出の先生がた〉18 神と人と日本に献げ
た生涯－キュックリッヒ先生 小島富美子

〈資料紹介〉16
「野菊の路」と水野菊子氏 東 夏子

学院史料展示コーナー紹介 祈りの建築
ヴォーリズが東洋英和に残したもの

松本 郁子

史料室の活動より（2009年2月～8月）

No.74 (2010.4.26) 特集：ミス・カートメル
ミス・カートメルの家系図をめぐって

キャサリン・カー（談）
〈資料紹介〉17 ミス・カートメルから齋藤春
子宛ての手紙 酒井ふみよ

〈思い出の先生がた〉19
新井竹先生の思い出 朽木 久子

史料室の活動より（2009年9月～2010年3月）

No.75 (2010.11.2) 特集：勤労動員
「東洋永和」の勤労動員 岩原さかえ

「東洋永和」の勤労動員年表 酒井ふみよ
戦時下の女学校生活 第1部 下山田典子

〈資料紹介〉18「東洋英和女学校
係文書」1 水谷 悟

〈思い出の先生がた〉20
梅澤雄一先生の思い出 佐々木喜久

史料室の活動より（2010年4月～8月）

No.76 (2011.4.25) 特集：勤労動員（2）
昭和20年8月16日からの5年間 岩原さかえ

戦時下の女学校生活 第2部 下山田典子
〈関連図書紹介〉「戦いと安らぎ
－1945年前

後の青山をめぐって」 中里 昭子著

〈資料紹介〉19「東洋英和女学校 勤労動員関
係文書」2 水谷 悟

〈思い出の先生がた〉21 小さい紙きれ
荒牧富士子先生の思い出 丹羽 輝子

史料室の活動より（2010年9月～2011年2月）

No.77 (2011.11.10) 特集：ハミルトン・コテージ
軽井沢に遺されていたミス・ハミルトンとミス・
ハードのコテージ 酒井ふみよ

〈資料紹介〉20 軽井沢で書かれたミス・ハミ
ルトンからミス・カートメル宛の書簡

酒井ふみよ

〈勤労動員 手記〉－安藤電気－ でもそこに
は青春もあったのです ドーヴァー留美

〈思い出の先生がた〉22 朝倉（孝吉）先生と私
－秘書、いえ教え子です－ 山田のりこ

史料室の活動より（2011年3月～8月）

No.78 (2012.5.15) 特集：別科（1934～1944）
別科における海外帰国子女、二世教育の特徴

服部 恵子

〈参考資料〉①私の見た日本 ②私の恩人：秋
山春子先生 原田（平井）知津子

〈資料紹介〉21 冊子「海外・帰国児童生徒教
育」の一考察 原和子著 富岡 暢子

〈思い出の先生がた〉23 白井節夫先生 子ら
と共に47年 伊藤 博正

史料室の活動より（2011年9月～2012年3月）

No.79 (2012.11.6) 特集：ミス・カートメルの遺品
ミス・カートメルの家系図をめぐって

ムさんからの寄贈品－ 酒井ふみよ

〈資料紹介〉24 清野 禮先生
一枚の色紙 雨宮美枝子

史料室の活動より（2012年4月～9月）

No.80 (2013.5.15) 特集：カートメル宣教師らのお墓を探して
有賀 誠一

〈資料紹介〉22 大学共同研究助成報告書：
I「カナダ・メソジスト婦人宣教師による

日本における乳幼児教育事業に関する資料
収集・調査研究2002～2004」、II（2008）、

III（2009） 石津 珠子

〈思い出の先生がた〉25 飯田泰造先生がして
くださったこと 森高ホサナ

史料室の活動より（2012年10月～2013年3月）